九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「テ＋イル」と「テ＋アル」

山下，和弘
福岡女子短期大学講師

https://doi.org/10.15017/11944

出版情報：語文研究. 65, pp.17-24, 1988-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「テ＋イル」と「テ＋アル」

山下和弘

はじめに

現代語に見られる「テイル」「テアル」は、中世頃からその用例が現れ始めている。[注一] しかし、過去の用法はどうやら現代とは違ったものだったらしい。このことについては夙に湯沢幸吉郎氏が触れておられる。[注二]

……「いる」は人に關して用いられる事に局限されて居る樣で、たとえば今日の東京言葉で、「鍵が落ちている。」とゆうのは、

◇これ見さんせ、鍵が落ちてある（下、七〇）[注三]

の如くゆうのが普通である。

また、

……要は「て」の上が自動詞である事が問題である。かゝる場合に東京言葉では、「ている」「ておる」を用いて、「てある」とは言はない。主體が有情である場合には、たとえば「馬が放たれてある」などは尚更言わないのである。

ここで述べられているのは近世の「テイル」「テアル」なのだが、「主語の性情（有情・非情）」と「動詞の自他」という外形的特徴をもって示され、現代と違う用法だったことがよくわかる。近年、坪井美樹氏はこれら外形的特徴に加え、現代語の「テイル」「テアル」の研究から得られた「様態（aspect）」の種類の区別を利用して、両形式の使いわけの変遷とその地域的相違を近世という時代において論じられた。[注四] 本稿はこういった論を承け、先学が未だいいつくしていないことを考察しようとするものである。

一

過去の時代における「テイル」「テアル」がどのような性格のものであったかを考えるにあたって、その頃の人による観察があれば、それは重要な資料となる。富士谷成章の『あゆひ抄』[注五]の次の記述は、早い時期に両形式に言及したものとしてよく知られている。

［何たり］［何は］［何て］に同じ。ただし状を受けず

［とあり］を引き合はせて［たり］と言ふは《有倫》に条をたつ。今は［てあり］を引き合はせたるをいふ。里言同じ。ただ

し《有倫》に定むるが如く「アリ」といふこと、里言には多く内にのみ言ひて外に言はねば「テアル」「テキル」など、そのところとところをはかりて当つべし。（傍線・山下）［巻五・て身］

これは、所謂完了・存続の助動詞「たり」に関する記述だが、この記述で注目されるのは「テアル」「テキル」の使いわけを、「テ」のついていない元の動詞「アル」「キル」と同質であると見なしているように思える点である。この他にも、

［何り］［何は事の目なり

［伏せり］といふこれなり。［てあり］［たり］などよむに似ていささか軽き言葉なれど、里言に別かつべきにあらねばただ［てあり］のごとく心得べし。さて「アル」「キル」互に当つべきこと前条にいふがごとし。（傍線・山下）［巻四・有倫］

やはり、「テアル」「テキル」の使いわけを「アル」「キル」と同様に見ているようである。なお、この部分の「前条」には、

［何あり］

……里言には外に「アリ」と言ひ、内に「キル」と言ふを、歌にはおしなべて［あり］とのみよめれば、心しらひして「アル」「キル」互に里すべし。［巻四・有倫］

とあって、「内外」という区別をしている。『あゆひ抄』では「おほむね下」でこの「内」を「有情」、「外」を「非情」といういい方をしている。

この『あゆひ抄』の記述から、おそらく近世中期の「テイル」「テアル」の使いわけには「イル」「アル」と同質のものがあったと推定される。

では、もっと前の時代ではどうだったのだろうか。『天草版平家物語』の「イル」「アル」の主語の性情を見てみた（主語に「の」或は「が」が下接したものに限った）。

［表一］

	有情	非情
イル	13	0
アル	21	59

［表二］

	テアル	テゴザル
	33	125

（表一）のように「イル」の主語は「有情」、「アル」は「有情」と「非情」の両方である。これは中世末の「テイル」「テアル」の主語の性情の違いと一致する。

また、「アル」の丁寧語「ゴザル」が「テアル」と同様、「テゴザル」という形で現れていることを、中世末の文献で多数確認することができる。『天草版平家物語』の「テゴザル」は一二五例、対して「テアル」三三例である。（表二）

○Tadaqiyo ga taixō ni mōxita ua: faxi no vye no icusa ua fi no zzuru fodo ni natte gozaru,……「忠清が大将に申したは：橋の上の戦は火の出るほどになってござる、……」［『天草版平家物語』巻二・第六］

「テアル」が「テゴザル」と交替し得るのは「テアル」の「アル」が元の動詞としての性格をかなり強くもっていたからではなかろうか。だとすればこの時期の「テアル」は、かなりの面で元の動詞「アル」と同様の性格を持っていたということができよう。そうして「テイル」と「イル」、「テアル」と「アル」の主語の性情がそれぞれ一致していることをも勘案すると、中世末の「テイル」「テアル」の使いわけには「イル」「アル」と同質のものがあったと思われる。

そうすると、この時期の「テイル」「テアル」の違いは、当時の「イル」「アル」の違いの或る面を反映しているということになる。次節以降、過去の時代の「テイル」「テアル」の違いを考察するが、そのことはとりもなおさずその時期の「イル」「アル」の違いの一面の考察ともなるのである。

二

中世末の「テイル」使用の制限は主語が「有情」であることだというのは、既に坪井氏によって確認されている。[注六] これに対して「テアル」が使用されたときの主語の性情は、『あゆひ抄』にいう「有情」「非情」の意味がどういうものかはともかく、普通認識される「有情」「非情」で制限されることはなさそうである。[注七]

『虎明本狂言』の「テアル」の用例をいくらか挙げてみる。

○清水へつやして西門にたちたるをつまとさだめよとのあらたなれいむをかうふりてある、いそぎいて見う　[いもじ]

○ゑほしもいできてあるか　いやまだゑほしやにござある。[あさう]

○《……めづらしひ物をおてらてたべたと云、何と云物ぞととふ、何やらめづらしひ物でござつたがわすれてござるといふ……》朝くらて有か　中々あさたべてござる　[ぶんざう]

○……わかひものが二人おふつまくつついたひたが一人はしとめて有程に今一人のがすなと……　[じしやく]

○誠にいほ(庵)がこしらへて有は　[なるこ]

これらは、「既然態」とでもいうべき「テアル」だといえよう。また、

○……両国の百姓、国を隔(ママ)でゝあるに……　[昆布柿]

○……目がつぶれたらよからふ、めがあひて有に依て、わき女をあそばすとおしやったほどに……　[かはかみ]

○……やをのぢさうの文を、このゑんまわうにたもる子細を汝はしつて有か　[やを]

○……某はあきんどのつかさをもつて有により　[酢はじかみ]

「国を隔(ママ)でゝあるに」の場合は両国の百姓がそれぞれ違う国に住んでいるという状態をいうのだし、「めがあひて有に依て」は失明した男が妻をなじって「おまえは、私が失明すればいい、目が見えるから浮気すると言ったことがある。だからおまえは、私が眼病を患ったときに看病を手抜きしたのだ」と言っているものだが、単に目が開いているという具体的な状態をいったものである。また、「汝はしつて有か」は、知っているという状態、「もつて有により」も、商人としての営業権を保有しているということで、具体的に手に何かを抱えているのではなく、抽象的な所有を表現しているのであるが、「既然態」でない「テアル」になると、こういう類のものしか見られないのである。

『狂言』以外でも、「テアル」の主語の性情に制限がみられないのは同様である。ところで『中華若木詩抄』[注八]の「テアル」のうち、「非情」の主語の用例を若干見てみると、

○花ノ影ガ一重々々。窓ニ映シテアレバ……　(中五ウ)

○杏耶桃耶ハ。サダカニ。見エ子ドモ。サキ乱レテアルソ。(中四〇オ)

○……唐ノ書籍等ニ記シテアルソ。(下四オ)

○其樹ノ梢ニ。昨日ノ雨カ。タマリテ。アリタヲ知ラヌ也。

（下二〇オ）

「非情」の主語は、このように植物であったり、命のないものであったりする。そうして「窓ニ映シテアレバ」「サキ乱レテアルソ」「記シテアルソ」「タマリテ。アリタ」はそれぞれ、目の前に見える「状態」であるといえるのではないか。いわば『狂言』の「めがあひて有に依て」と同じようなものと見ることができるのではないか。これらのことについて、以下のようなことが参考になろう。

『虎明本狂言』の「ト書き」を見ると、次のような状況が見える。

［テイル］

○《……すまふをとり、くみやうていを……》［はうちやう智］

○《二人してしうとをころばかし、おつとのかほをぬぐひて、おつとをおふている》［同］

○《……ぶたひを、ゑひさら、ゑひさと云てまはり、つめに、あどくびのなははづひて、みな〳〵うちたをひいている》［首ひき］

○《おびをひっぱりている》［いもじ］

○《おんなこしかけているを男がつきたをいている》［同］

［テアル］

○《……しやくやくの花が、人のうらにみ事にさひてあるをみて……》［どひつ］

「ト書き」といっても、その中にはセリフを指示した部分もあれば説明の部分もある。そうして、右に挙げた用例はすべて説明の部分である。「ト書き」における「テイル」「テアル」の用例数は（表三）の通りである。「ト書き」は舞台上の人間の動きや仕種を指示するものであって、そのような場面で「テアル」がこのように現れにくいということをも今までのことと考え合わせると、「テアル」の性格がかなり見えてくるように思える。「テイル」が有情の主語の場合にのみ使われることとは別に、「テアル」も有情の主語のことが多いというのは今までに挙げた用例からも明らかである。

［表三］

	説明	セリフ
テイル	22	2
テアル	1	2

以上本節では、中世末の「テアル」は、具体的・抽象的はともかく「状態」もしくは「既然態」を表現しており、主語の性情には制限されないこと。そして、人間の動きを指示する『狂言』の「ト書き」ではそれが現れにくいということを補足して示した。

三

中世末における「テアル」は、「既然態」や、具体的あるいは抽象的な「状態」を表現する場合に使われるというものであり、主語の性情は関係しないのであった。これに対して「テイル」は主語が「有情」のときに使われるのであった。

中世末のものの観察に続けて、本節では『あゆひ抄』の時期に近いものの観察を行う。これにあたり「テイル」「テアル」とも、多数その用例が見られる資料として『古今集遠鏡』[注九]を取り上げる。

『古今集遠鏡』における「テイル」「テアル」の状況は次に挙げる

ように、やはり、『虎明本狂言』を主たる資料として考えた中世末の状況と同様であるように見なされる。

［テイル］

○……鶯ノオモシロウ鳴テキタ（一〇〇）

○ワシハツレソフテ居ル男ニツイテ心苦ナ事ガアツテ……（一一三）

○人ガ立テキルガ……（四五八）

○ワシガ中ハハヤ世間ノ人モ知テ居レバ……（八一〇）

［テアル］

○マヅ僧正遍昭ハ歌ノテイハ得テアツタケレドモ……（序）

○霞ノタツテアル春ノコロハ……（一〇三）

○アノ女郎花ハ天川ノカハラニハエテアルデモナイニ……（二三一）

○名ノ高カツタ野中ノ清水ハ今ハモウナマヌルウナツテアルケレドモ……（八八七）

さて、『古今集遠鏡』には、非情の主語のときに擬人法と思われる「テイル」使用の例も見える。

○……花ヲ　此ヤウニチラス風メガ逗留シテ居ル所ハ……（七六）

○……秋ノ野ニアノヤウニ女郎花ガ大ゼイヂヤラクラト云テ立テ居ルガ……（一〇一六）[注十]

ところで、

○……此立田川ノ紅葉ガヅツト下ヘナガレテイテ……（二九三）

のように、やはり非情の主語のときに「テイル」が使われている例だが、この訳文は文脈から、紅葉の葉が川の流れに乗って流れていくさまを説明したものと思われる。そして、二九三の歌は、「もみぢ葉の流れてとまるみなとには紅ふかき波や立つらむ」であり、この歌に擬人法があるとは、一見思えない。

これに類した例が『唐詩選国字解』[注十一]にも見られる。

○白鷗ノ居ルキハヲ乗ツテ通テモ、ニゲズニトモ〳〵アソンデ居ル［巻二・七オ九］

○アシガシゲツテアル其間ダニ、鳥ナドガ泊テアル［巻一・一五オ一一］

前の例は鷗が遊んでいる、つまり動きまわっている様子を述べたもので、後ろの例は鳥が動かずにとまっている様子である。さらに「アシガシゲツテアル」に対して、

○浮草ナドモ、淪漪ノサヽ波ニ舞テ居ル［巻一・一七ウ二］

同じ植物でも、このように波に「舞テ」いるときには「テイル」が使われているのである。また、

○此ノ江水ハ何ゴヽロクナガレテイル［巻七・二一オ一〇］

元の和歌や詩に擬人法が使われていなくても、非情物の主語が動いている状況の描写であれば、それをあたかも生きているかのように捉えたということは十分に想像できる。非情物は一般的にいって、動かない。ところが主語であるものが非情物だとしても、それが動いているのならあたかも有情であるかのように表現することがあり、その意味で有情の範囲が多少広まった、ということがいえようか。中世末に有情物として認められるのは人や鳥といった動物に限られていたが、この時期では「主語であるものの具体的な動き」があれば、それら以外の主語を有情物とみなすこともあったように

思える。

述語の表現する内容が「既然態」や「状態」であれば、その文の主語は人間であろうと植物であろうと発言時において動きに関係ない。対して、その文の主語たるものが動いていればそれが一般的には非情（たとえば植物）でも有情とみなして「テイル」が使われることもあったのではなかろうか。

ここまで述べたことについて、次のような言及が注意される。

まず、森田良行氏だが、

「いる」も存在を表すが、これは意志的なものの存在。人、動物、および擬人化した物（それ自体移動可能なもの、乗り物など）の存在に用いる。漠然とした存在から、ある場面での具体的存在まで幅が見られる。[注十二]（傍点・山下）

これは現代語において「アル」と対比して「イル」を説明したものである。また、三浦つとむ氏は、

……われわれは「ある」「いる」を特に意識して使いわけているわけではないが、そこにやはり一貫性のあることがわかってくる。生物と無生物、あるいは不特定と特定などという対象のありかたとはまったく関係なしに、対象を動きまわるものと把握したときには「いる」を、たとえ同じ対象でも動かないときや動きを捨象して静止的に把握したときには「ある」を、使いわけているのである。鷗外が宴会の席の人びとの描写に「ある」を使ったのも、筆者のいいかたを借りるなら「純客観的に」自分からつきはなして、いわば菊人形の一場面でも見物するような意識でとらえたからである。[注十三]（傍点・原文）

現代語の「イル」と「アル」については、両氏のほかにも多くの方々による言及があって、両語の違いは極めて難しい議論になっているのだが、その中で両氏の把握の仕方は、興味深いことに右に述べた『古今集遠鏡』や『唐詩選国字解』の用例から推定したことと基本的に一致しているのである。たとえ、現代語における「イル」「アル」の「有効な違い」がここに挙げた「動きに関わること」でないにせよ、このような見方ができるのはこういう性格を現代の「イル」「アル」が一面ではあっても持っているからではなかろうか。[注十四]少なくとも私の内省ではこのことに肯定的な感触を得た。

既に第一節で中世末から少なくとも『あゆひ抄』の時期では「テイル」と「イル」、「テアル」と「アル」がそれぞれある面で共通の性格を持っていたことを述べた。そのことを勘案すると、『あゆひ抄』に近い時期では、森田氏と三浦氏が述べた「イル」「アル」の違いに近い性格が両語にあり、その性格が「テイル」「テアル」に反映して右に挙げたような現象を示したといえよう。

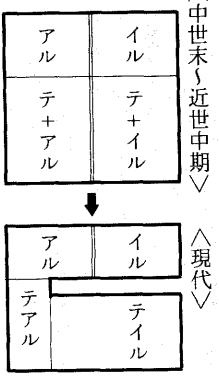
こう考えると、今まであたかも熟合した形式であるかのように過去の「テイル」「テアル」を扱ってきたが、むしろ「テ＋イル」「テ＋アル」と扱うほうが実態に即したように思われる。現代語の特に「テイル」のように「イル」という動詞の意味から大きく離れ、一つの文法的範疇のための形式（アスペクト形式）だという学説が出されるほどに熟合し形式化したものとは違うのである。

だとすると、今までに述べた中世末から近世中期における「テ＋アル」は、その上接動詞（制限なし）の意味する動作の結果が「今、ある」と捉えられるのではないか。「めがあひて有」「しとめて有」「しって有」「もって有」「サキ乱レテアル」等、このように考えて無理はないように思える。「既然態」であるか「状態」であるかは上

接動詞の意味する動作の性格によるのであろう。このように見ると中世末から近世中期頃の「テ＋アル」が理解できるのではなかろうか。

ところで、「テ＋イル」が現代語の「テイル」のように熟合し形式化が進んだことについてだが、何らかの理由で「テ＋イル」の使用範囲が広がって、「テ＋アル」の範囲を侵食していくと共に「イル」「アル」の違いに対応しなくなり、「テイル」という形で独立性を高めていったのではないかと思われる。これが進んで、現代語の「テアル」は、上接動詞（他動詞）の意味する動作の結果が「物」あるいは「準備したこと」として「ある」のを表現する用法に限定されたのではなかろうか（図）。ただし、「テ＋イル」による侵食が始まった理由までは、ここでは示すことができない。

［図］



以上、中世末から近世中期頃の「テ＋イル」「テ＋アル」について幾つかのことを述べてきた。ただ、これらの時期の「テ＋イル」「テ＋アル」の使いわけがこれですべて明らかになったわけでは当然ない。本稿は一つの視点から解釈を試みたに過ぎない。「イル」「アル」には、ここで触れた以外の性格もあるだろうし、特に近世の「テ＋イル」については、現代のように熟合した形式になる過度期であるともいえ、個々の用例について一層の注意深い考察が必要であろう。

［注］

一、柳田征司氏「近代語「テアル」」（『愛媛国文と教育』一九昭六二・一二）は中世以後の「テアル」が上代に見える「テアリ」と連続したものであることを論証した。首肯できる論である。ただ、本稿では一対の「テイル」と「テアル」を対象としているため、そのような用例は中世になってから見える、としているのである。

二、『室町時代言語の研究』『徳川時代言語の研究　上方篇』『江戸言葉の研究』。ここに引用したのは『徳川時代言語の研究　上方篇』一三七頁と一四二頁である。

三、『徳川時代言語の研究　上方篇』の「引用書」の項の略名・頁数と対照すると、近松門左衛門の「傾城富士見る里（第二）」である。

四、坪井美樹氏「近世のテイルとテアル」（『佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集』昭五一・一二）。

五、体裁は、中田祝夫氏・竹岡正夫氏著『あゆひ抄新注』に依る。

六、坪井氏「近世のテイルとテアル」。

七、テキストは池田廣司氏・北原保雄氏著『大蔵虎明本狂言集の研究　本文篇』（上・中・下）を用いた。引用文の体裁はこれに依る。例えば《　》でくくったのは「ト書き」であることを示す。

八、テキストは国会図書館蔵寛永十年版で、『抄物大系』所収（『勉誠社文庫』再録）のものである。

九、『本居宣長全集』3（筑摩書房）。

十、『稿本あゆひ抄』（引用は竹岡正夫氏著『富士谷成章全集』の体裁に従う）には次のような記述がある。

ヱるヱりヱらヱれ　ヱはよそひの目前也、らりるれろ皆有の心なる故

に里に一ツテアル一ンテアル一シテアル一イテアル一イデアル一扨此数語ヲ又所により有情のものにはテキルと心得てよむべし、○㊀○㊁多き詞なれば引哥に及へからす、今ひとつふたつをいたして大むねを見す、……秋の野に（なまめきたてるをみなへし、古・一〇一六）の哥は非情の女郎花を有情になしてよめる也、〈有類〉

また、

内外の詞といふことあり、あら〳〵といへは、内は我うへ、外は人物事の上にまかせていふ詞されと《哥に》《螢》人物事をわかうへになしていふときは又内詞となるなり、行螢雲の上まていぬへくはのへくの類也。螢は外なれど螢に《行》とはゞいぬへしとこたふる心をもちていふ故也、内詞也、〈おほむね〉

十一、服部南郭。刊記は、

文化十一年甲戌六月再板

書肆　江戸日本橋南貳町目西側角

小林新兵衛　梓

十二、『基礎日本語』1（昭五二・一〇）五一頁。

十三、『日本語の文法』（一九七五・七）一九三頁。

十四、瀬良益夫氏「万葉集における有情とその存在の表現――「ゐる」と「をり」を中心として――」（『語文研究』六・七合昭三一・一）は上代においても「ゐる」「をり」と「あり」との間にこのような関係があったとする。